

福島大学附属図書館報	No.40 2008.4.1 発行
<h1>書 燈</h1>	
〒960-1293 福島市金谷川1番地 TEL (024) 548-8083 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/ 携帯電話版 http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm	
福島大学附属図書館	

本と電子データ

附属図書館館長 星野 珙二

本をすべて電子媒体化して保管し、誰でもが自由に検索できるようなシステムがあれば、いわゆる図書館という物理的スペースは不要なのかもしれない。それは、電子図書館という現物としての書物そのものにこだわらない、いわば「サイバー図書館」と言っているものかもしれない。

本=文字データの集まり、と解釈すれば今述べたようなことは疑いもなく成立するのであろうが、おそらく多くの人々は、本というものに、単なる文字データの集まり以上のものを感じているに違いない。まず、本を手にしたときのボリューム感や手触り、そこに執筆者の意図した世界の全体像が閉じ込められているという実感、これは電子媒体化されたデータからは得にくいものである。まさに、その本を手にした者にしか分からない感覚的な世界が広がってくる。さらには、本の装丁やデザインからは、その本を世の中に送り届けようとするメッセージ性が感じられるし、ページの割付けや文字のフォントや余白などからは、その本の内容を伝えるために工夫された心遣いが伝わってくる。

これらの内容は、一般的に電子媒体化されたデータから得ることは難しく、もし仮にこうした感覚的なものまで電子媒体で表現しようとするれば、多くの記憶容量やコストの負担が必要になってくる。たとえば、人工知能の研究者が人間の頭脳の働きをコンピュータで実現しようとして研究を進めていくと、改めて人間の頭脳の素晴らしさが見えてきてその実現の困難性を意識させられるのと同様に、現物のイメージにこだわる「サイバー図書館」を実現しようとする、人間の創造物であ

る本の世界の奥深さに改めて気づかされることになるであろう。

そこで、改めて「本」について考えてみると、本=文字データの集まりではなく、視覚における総合的な創造物であるとも言えるのではなかろうか。本が出版されるまでのプロセスに想いを馳せてみても、著者の執筆にける想いや意図があり、出版者の本を世に送り出す狙いがあり、編集者の読者の視点に対する配慮があり、デザイナーや装丁者の心意気がぎっしり詰まっている。1冊1冊の本はかけがえのない創造物である。

一方、電子媒体化されたデータの特徴は、電子データに情報処理が容易に適用できることから、格段に情報検索などの利便性が增大するところにある。論文を書くものの立場からは、関連しそうな先行論文の存在はしっかり把握しておく必要がある。このような場合に、電子データ上での情報検索は有難い強力な手段になる。また、創造物である1冊1冊の本に確実に会うためにも、情報検索は必要であり、図書館においてはこの特徴を活かして、本と電子媒体化されたデータの蓄積による相乗効果を高め、利用者の利便性を図っていくことが肝要であろう。

歴史のあるわが福島大学附属図書館には、そのような本が82万冊所蔵されている。そして、本の検索データはもとより、電子媒体化されている検索可能な論文などのデータも着実に増え続けている。大学の教育、研究を支え、地域にも愛される図書館として、さらに歴史を積み重ねて行きたいものである。

附属図書館ギャラリー・コンサート2007

～アフター・クリスマスに想いをのせて～

小椋 正行

2007年12月26日 附属図書館ロビーを会場にギャラリー・コンサート2007を開催しました。昨年に引き続き2回目となります。今回のコンサートには、二つの特徴があります。一つは福島市制100周年への協賛事業として取り組んだこと、もう一つは民話の語りと三味線とのコラボレーションを取り入れたことです。

コンサートには、本学の学生や教職員が関係するバラエティーに富んだ8団体・個人が参加しました。コンサートの雰囲気をお伝えできないのが残念ですが、今回の目玉として取り入れた民話「吾妻の婿さま」の語りと三味線との絶妙なコンビネーションには、手作りコンサートならではの感がありました。

コンサート会場には、120席を用意しましたが、満席となり、大盛況でした。今回の観客層を見る

と一般の方が多く、市内各地からお集まりいただいたようです。美術専攻の大学院生による洗練されたポスター、NHKによるイベント情報などによる広報活動が功を奏した結果といえます。

コンサートの準備は、図書館を中心とした有志による手作りです。そのため、いろいろご不便をおかけした点があったことにはご容赦願いたいと思います。今はコンサートが無事終了し、観客の皆様から心温かい感想をいただいたことにホッとしているところです。

(このアドレスで感想が見られます。)

<http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/cgi-bin/webmail/10/2007concert.html>

最後になりますが、出演者の方々、実行委員、そしてお手伝いいただいた皆様には心から感謝しています。(実行委員長)

カウンターの内側から

地域政策科学研究科2年 鈴木 貴士

この「カウンターの内側から」は、「内側から」の後に「何をどうするのか」がまったく示されていない、書き手泣かせのコーナーである。自由裁量が大きいとはいえ、危険なネタを暴露するわけにもいかないし(注:実際は危険なネタなど実在しません)、利用上の注意を促すにしても、この「書燈」読者層は、マナーを守る優良利用者のはずなので(…ですよ)、いまさらという感がある。思い悩んだ末、仕事の日々雑感をなんとなく書き付けていく方針(当世これをブログ風と呼ぶ)をとりたいたいと思う。

図書館の仕事に、閲覧請求された本を探してもってくる、というものがある。通常、閲覧請求書に請求番号(背表紙に3123/Sh19…などを書いてある番号)、資料ID、配架場所、そして本のタイトルを書いてもらって、それを頼りに本を探しに行く。だが実際は、請求番号と配架場所さえ書いてあれば本を探せない事もゴニョゴニョ(注:大人の事情で明言できません。皆さんはきちんと

書いてくださいね)。あるとき、本のタイトルしか書いていない請求書を渡されたことがあった。これでは探せません、と請求番号と場所を書いていただいたが、その時ふと思った、「本のタイトルだけみて誰が一番早く本を探し当てられるかを競争したらおもしろいやろなあ…。きっと図書館マニアなら本のタイトルだけで何処に置いてあるか判断できるはずだし…。こういう妄想は、くだらないだけに考え出すと止まらない。「ルールはどうする…。雑誌を混ぜると難易度が高すぎるのでは?開架と閉架は分けないと重複する本もあるし…。図書館内だから走ったらいかんよな…」などと、思いは膨らんでいく(実現は不可能だろう)。

既に何が言いたいのか分からない状態だが、ここから導かれる結論は一つ。くだらない事を考えていられるだけ暇だというである。皆さん、もっと図書館を利用しましょう!!

海外の図書館事情

人間発達文化学類 屋田 源四郎

福島大学の姉妹校であるミドルテネシー州立大学(MTSU)は、州都ナッシュビルから車で40分程のマーフリースポロ市にある。約2キロ平方メートルの広大なキャンパスをもつ総合大学で、学生数は2万2,500人余りである。

スマーナを中心に日産自動車やその関連企業が集まるテネシー州中部は、米国内でも発展が著しい地域のひとつであり、MTSUへの入学者も急増している。カントリーミュージックの本場として知られるナッシュビルが近いせいもあって、レコーディング産業の演奏家や技術者を育てるとか、パイロットや航空整備士の養成をするなど全米的にもユニークな学部をもち、大学上空には飛行機がいつも飛び交っている。

キャンパス内には大小、新旧入り混じった数多くの建物群があるが、ひととき大きく新しい建物がジェイムス・ウォーカー図書館である。1999年オープンで4階建て、床面積は2万3,200平方メートルで福大図書館の約3倍ある。



1階入口を入ると、天井まで吹き抜けの明るいホール。その右手に60台のコンピュータが並ぶ電子情報センターがあり、館内の図書検索や電子図書の閲覧ができる。ホール左手に図書の貸し出しコーナー、その奥にスターバックスが運営する喫茶室がある。ホールの前方奥が、広い書庫になっている。書庫の位置は1階から4階まで同じで、2階からは書庫の手前にコンピュータが並んだ検索コーナーがある。書庫は一部を除いて全館開架式で、誰もが自由に出入りできる。

閲覧室は2階以上の各フロアにあり、4人がゆったり座れる大きな机がいくつも並んでいる。机

のわきにはコンセントとLAN接続のモジュラージャックがあり、ノートパソコンを持ち込めば研究室より快適に仕事ができる。

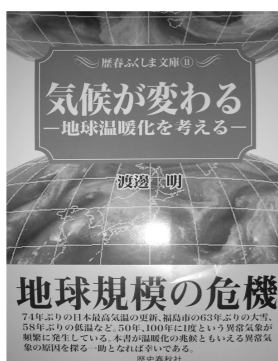


とても良いと思ったのは、ガラス張りの集団学習室があることだ。これは全部で43室あり、小グループでの討議もできる。防音になっているので、他の利用者の迷惑にならない。ソファの並んだ休憩室も広くて、図書館全体がゆったりとした快適空間である。教員用の専用個室が80室あり、登録すればそこも使えるようだ。

電子図書のプリンター利用は無料。コピー機は使用料が高いうえに使い勝手が悪くて、とても困った。これは研究棟のコピー機も同様で、レターサイズの用紙しかなく、見開きでの本のコピーは無理で、しかも端が切れたり余ったりする。仕方ないので情報処理センターのスキナーで取り込んでPDFファイルにして大部の資料を持ち帰ったが、スキナーが1、2台しかなく空いていなかったり、旧式でスキャン速度が遅かったりと、たいへん苦勞した。

学期中は月～木は朝7時30分から深夜12時まで、金～日は時間を短縮して開館している。MTSU周辺は比較的犯罪の少ない地域であり、学内ではパトカーが24時間巡回している。希望すればエスコート・サービスもある。それでも深夜の独り歩きは危険で、2006年に滞在した3ヶ月の間に、図書館帰りの女子学生が駐車場で暴行されるという事件があった。福大でも夜間開館の時間帯を広げる際には、防犯への配慮が必要となる。

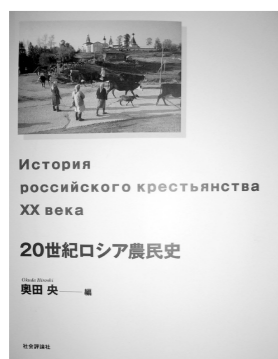
学内教員著作寄贈図書



『気候が変わる
—地球温暖化を考える—』
歴史春秋出版 2007.11
渡邊 明 著
請求番号：090/R25r/11

地球温暖化は一様に地球が高温化する現象ではない。気候変動枠組条約がブラジルリオデジャネイロで調印されたUNCEDから15年、地球温暖化問題は「狼が来るぞ」「先進国の贅沢な問題」と表されながらも京都議定書の議決、発効、そして今

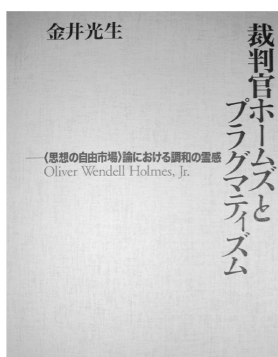
年4月からの約束期間の開始と、常に経済成長優先の狭間で揺れ動きながらも世界的合意が進められてきた。しかし、その中身は1990年比で5%削減どころか、2007年11月地球大気中の二酸化炭素濃度は、ついに380ppmを超え、様々な国で地球温暖化が影響していると考えられる極端現象が多発している。2007年のお盆のような暑い時には温暖化が意識できても、2006年寒冬の時にはもう温暖化問題は消えたのではないかと思われ、継続的な取り組みができない現状がある。この本はこうした極端現象の出現こそ地球温暖化が原因であることを示し、温暖化問題を科学的に捉えることを目指したものである。ご一読いただければ幸いです。



『20世紀ロシア農民史』
社会評論社 2006.11
奥田 央 編
(浅岡 善治 分担執筆)
請求番号：611. 9/O54n

東京大学大学院経済学研究科・奥田央教授を研究代表者として一昨年度まで実施された日露共同研究「20世紀ロシア農民史研究」(日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究B)の成果をまとめた論文集です。既に露語で XX век и сельская Россия.

Российские и японские исследователи в проекте «История российского крестьянства в XX веке», Под редакцией Хироси Окуда, CIRJE Research Report Series CIRJE-R-2, Faculty of Economics, University of Tokyo, 2005 が刊行されていますが、本書は一篇を除いて全て新稿で構成されており、現行のロシア農民史研究の最新の成果に触れることができます。当方は論文一篇・翻訳一篇を担当していますが、そのことが本書の水準をトータルで低下させてはいないかと懼れることしきりです。



『裁判官ホームズと
プラグマティズム』
風行社 2006.2
金井 光生 著
請求番号：321. 2/Ka44s

本書は、アメリカ合衆国連邦最高裁判官オリヴァー・ウェンデル・ホームズJr. (1841-1935)のプラグマティズム法思想を解明したものである。ホームズは、ハーヴァード・ロースクール教授ののち、裁判官としてリベラルな画期的判決を多く残したことで、現在でも

法学界において著名な人物であるにもかかわらず、従来、彼の法思想の全体像はほとんど明らかにされてこなかった。本書は、ホームズ法思想を、ウィリアム・ジェームズの唯名論的实用主義と、チャールズ・サンダース・パースの実在論的非实用主義という、二つのプラグマティズムと比較検討した上で、平時戦時にかかわらず表現の自由は最大限に保障されるべしと判示した「思想の自由市場」論を頂点として、パース哲学の観点から整合的に解明すると同時に、表現の自由の優越的地位や、立憲主義と民主主義をめぐる原理的問題に新たな光を当てて、現代に対する示唆を行ったものである。本書については、2006年度日米法学会にて合評会が開催され、2007年度日本法学会にて学会奨励賞が授与された。

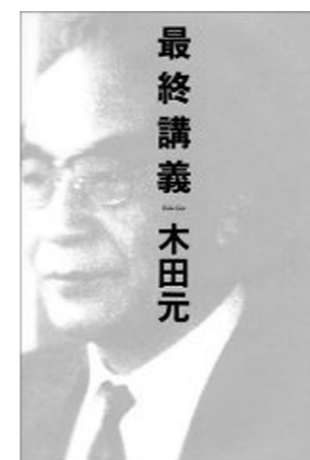
思い出の一冊

経済経営学類 衣川 修平

最終講義

2007年度は私の所属している会計学講座からお二人が退官されることになり、最終講義を末席にてお手伝いさせていただいた。近頃は特別にセレモニーなどしなくてよいといわれる方も多いようだが、お弟子さんや生徒、縁故の方々からの花束の贈呈などは、出席している者も心が動かされるものがある。

しかし最終講義のメインはやはり退官される方の講義である。ご自身の今までの研究を振り返って総決算とする講義が多く、研究の時代背景や、それを生み出す苦勞、情熱といったものが理解できて非常に参考になるし、意義も深く、私は最終講義を拝聴するのを楽しみとしている。



最終講義 木田元

考えてみると、『最終講義』と題された書籍も何冊が出されており、私自身も数冊所有している。

一つは木田元著『最終講義』(作品社、2000年)である。木田氏のことはメルロ＝ポンティの翻訳者として知っていたが、それまで木田氏の著作は読んだ

ことがなく、この本も本屋でたまたま手にして購入したものである。

余談になるが福島には大型書籍店がなく、書籍を手にとって購入できないのが寂しい。ネットで面白そうな本を片っ端から購入することもあるが、「外れ」が多くて困っている。

木田氏は農林高校時代にドストエフスキーを読み、そこからハイデガーに興味を持つ。そしてハイデガーを理解したい一心で、大学に進学し、哲学の研究を続けてきたのだという。また、メルロ＝ポンティやフッサールの翻訳などもハイデガーを読むための研究であったという。稀有とも言える「一貫した」人生であり、現実的な判断、処世で専攻を選んできた自分はなんとも恥じ入るばかり

りである。しかしまた、このような理想を貫く人生の壮絶さも容易に想起できるところであろう。

もう一つの書籍は、中井久夫著『最終講義』(みすず書房、1998年)である。中井氏は統合失調症の臨床・研究で著名なばかりではなく、現代ギリシャ詩の翻訳や、『記憶の肖像』『家族の深遠』(両書ともみすず書房)などの名エッセイでも知られる文人でもある。現代では稀有な存在となった「知識人」であるとも言えよう。

私は中井氏の著作は手に入れられるものは、すべて手に入れて読んできたほどのファンなので、逆にここで何を書けばよいか迷ってしまう。氏の業績があまりに広範囲にわたるといこともある。

今まで氏の深い洞察力に教えられ、柔らかな感受性に救われることもあった。中井氏は神谷美恵子さんを評して「両側が断崖である痩せ尾根を走りとおす」(『時のしずく』みすず書房、203頁)人生であったとしているが、これはとりもなおさず氏自身にも当てはまる言葉であろう。そのような困難な生を生き抜いてこられた氏に、直接、間接に「静かに」励まされてきた人は多いのではないのだろうかと思う。

なお浅田彰氏の『逃走論』は、中井氏の『分裂病と人類』あたりを大いに参考にしているものと思われる。浅田氏が「逃げるや逃げる」と世の中をおおったとき、

「いったいどこに逃げるというのか」とまじめに反論する論者がいたが、「スキズ」(中井氏の言葉を借りればS親和者)は、社会の「上方」に逃走するのだと思う。しかしそれもまた難行であることは言うまでもない。



「福島大学学術機関リポジトリ」、 本公開がはじまりました

情報メディア委員長 小沢 喜仁

2008年3月3日、「福島大学学術機関リポジトリ」の本公開がはじまりました。学術機関リポジトリ (Institutional Repository、以下IRと略す) とは、大学などの学術機関内で創出された、さまざまな学術情報を収集・登録・蓄積して、広く国内外に公開・配信することを目的としたネットワーク上の「電子書庫」のような役割を持つシステムです。その対象となるコンテンツとしては、論文・図書、教育用コンテンツ、学術データベース、特許情報やソフトウェアなどさまざまな学術情報データが想定されており、研究者どうしばかりでなく一般の方々も含めたコミュニケーションのシステムとして欧州や豪州などにおいて比較的古くから運用されてきています。

本学においては、附属図書館が中心となり、2004年度から調査・準備を重ねてきました。06-07年度においては、国立情報学研究所の委託事業「次世代学術コンテンツ基盤共同構築のための委託事業」に参画して事業経費を獲得し、IR構築をはじめとする学内の学術情報提供基盤を整備して、本公開に至っております。IR構築・運営については、情報メディア委員会に学術情報交流のための任務を追加し、学術・情報教育専門委員会に実施責任を持たせ、さらにこのもとに3つの部会からなる「IR作業部会」を設置しました。

昨年12月10日試験公開を開始しましたが、前後して全学の教員、附属センター及び学内学会組織に説明会やガイダンスを開催して、IRの目的、仕組み、期待される効果や著者が有する著作権との関連について、説明を重ねてきました。また、IRをより身近なものとして受け入れていただくために、名称・愛称を募集したところ、9件の応募をいただき、学術・情報教育専門委員会が審査を行い本公開にあわせて表彰式を行いました。経済経営学類1年生の山下敏史さんによる「FUKURO_フクロウ_」を入選とし、正式名称を「福島大学学術機関リポジトリ」、英語名「Fukushima University Repository」とすることを決定しました。今野順夫学長から賞状をうけた山下君の挨拶において、考えた英語訳においてそれぞれの単語のはじめの文

字を中心として構成し、「福島大学」「ふくしま」の音の響き愛称を込めたかったこと、学問研究、智慧の象徴にもたとえられるフクロウのイメージを重ね合わせ、愛称としてふさわしいとして提案したと説明がありました。佳作2件には、人間発達文化学類2年生星久美子さんの「F-USE」、経済経営学類教員遠藤明子さんの「FAIR」が受賞されました。

「FUKURO_フクロウ_」には、本学が創出する教育研究成果として、学術論文、科学研究費補助金成果報告書、学会発表資料、教材研究など幅広い教育研究成果を登録し公開していきます。研究成果はGoogleやYahoo!などの検索エンジンからも検索できますので、アクセス性と引用性が格段に高まり、本学研究者の教育研究成果を専門家である研究者ばかりでなく、一般の人々にも広く知ってもらうことができるようになります。

福島大学は、さらに高度な研究活動を推進し、もって質の高い教育を提供し、その研究教育の成果を公開することにより、地域をはじめとする社会に、さらには世界に貢献することを目指します。

福島大学学術機関リポジトリ
Fukushima University Repository
<http://ir.lib.fukushima-u.ac.jp/>



記念式典において挨拶する今野学長

展示コーナーの利用を通して

松川資料室 伊部 正之

松川資料展を開催 - 1階ロビー展示コーナーで -

1 松川事件と松川資料室

1949年8月17日の未明、東北本線金谷川～松川間で旅客列車が脱線転覆し、3人の機関車乗務員が亡くなりました。これが松川事件です。容疑者として国鉄・東芝の労働者20人が逮捕・起訴されましたが、5審・14年におよぶ裁判で全員が無罪となりました。判決の本旨は証拠不十分による無罪ではなく、無実ゆえの無罪でした。

金谷川キャンパスに統合移転した福島大学は、この歴史的な大事件に関する資料の収集事業に着手し、1988年10月に「松川資料室」を開設しました。ここには10万点におよぶ関係資料が収集・整理され、広く公開されています。

2 学内初の一般向け松川資料展

松川資料室では、これまでも様々な機会に資料の展示に関わってきましたが、この度、附属図書館のご理解とご協力を得て、学内を会場にした一般向けの資料展を初めて開催することができました。その概要は次の通りです。

趣 旨： 福島歴史をあらためて考える
日 時： 2007年10月5日～11月4日 (31日間)
場 所： 附属図書館1階ロビー展示コーナー
主 催： 福島大学地域創造支援センター
福島県松川運動記念会
展示物： 解説、年表、写真、地図、獄中絵画判決書、書籍、雑誌 など約100点
ビデオ： 「松川事件」「にっぽん泥棒物語」
講演会： 元被告が語る松川事件の真実 (11・3)
見学者： 500人 講演会： 160人 (満員盛況)

3 成果と反省、今後の課題

資料展の会場が図書館1階ロビーであり、土日にも開館していることが、学生や一般市民の見学を可能にしました。期間中は「松川資料室」研究員と松川運動記念会有志が連日会場に立ち、資料の管理と見学者への対応に当たりました。途中で資

料の補充や展示方法の改善なども行いました。

来訪者の中でとくに印象に残ったのは、国鉄・JRに関係した家族連れがとりわけ熱心に見学していたことです。ビデオ上映も大変好評でした。元被告講演会には、近県や東京方面からの参加者もありました。ノートやアンケートにも色々と意見・感想をいただきました。

このように、今回の資料展はおおむね成功を取れたと評価できますが、反省点もいくつかあります。まず、展示物の説明書きや解説リーフなどが必要でしたが、手が回りかねました。開催期間が1カ月無休(31日間)という長丁場になったのも、再考の余地がありそうです。資料の安全対策はとくに講じませんでした。事故が起きてからでは遅すぎます。これらの点は次の機会にはしっかり対処する必要があるでしょう。

見学者からのご意見では、この種の資料展や講演会を定期的に、あるいは地方でも開催して欲しい、松川事件の内容や背景について詳しく聞ける機会を作って欲しい、などが出されていました。こうしたご要望にお応えするには、体制の整備や人材の養成を具体化していく必要があります。

とくに、2009年には松川事件発生60周年を迎えます。色々と多面的な対応が求められることは間違いありません。



こんなものがあったのか!

地域政策科学研究科2年 原田 悠人

受験勉強というものをしていたはるか昔、私は古典というものが余り好きではなかった。堅苦しい文体、重たいテーマ、と良さの欠片も感じなかったのである。そんな折、ふと見つけてしまったのが『桃尻語訳 枕草子』であった。古典嫌いであった私だが、結局の所、しっかりとこの本を読んでしまった。ただし、受験にいい影響があったかといわれれば、それはまったく別の話である。

この本は題名を見ていただければ想像がつくと思うが、普通の現代語訳ではない。前書きのスタートが「こんにちは♥あたし清少納言です。」から始まるのである。さらには皆さんも良くご存知だと思う「春は、曙。やうやう白くなりゆく、山ぎはすこし明りて・・・」という枕草子の書き出しは。「春って曙よ! だんだん白くなってく山の上の空が少し明るくなって、・・・」になってしまう。印象的な「灰がちになりてわるし」にいたっては「灰ばっかりになって、ダサイの!」と清少納言氏によって一蹴されてしまう有様である。このように訳者の橋本治氏による独特な現代語訳が展開され、非常に面白い仕上がりとなっている。しかし、この本のポイントは読みやすさだけでなく、これが直訳(!)であること、また読者を平安世界に引きずり込む註釈であるだろう。

原典を見比べると分かるのだが、枕草子が述べたいことを的確に捉えており、清少納言御自ら(ということになっている)の註釈は藤原道長の時代の背景、貴族の衣食住や習慣などに対しても詳しい解説となっている。

清少納言が使っていた藤原定子は本来ならば藤原家本流の娘であったが、道長の台頭によって兄を追放されるなど宮中において段々不遇となっていく。そのような状況にありながら日々の楽しいことを枕草子は描いている。また、清少納言と紫式部は仲が悪かったといわれており、紫式部は清少納言を「知ったかぶり」、清少納言は紫式部を「暗い女」と評している。このような時代背景も踏まえながら読む古典は面白い読み物なのである。

おわりに、文中の言葉を借りると清少納言は「ナウいキャリアウーマン」である。ナウいという言葉を使う人が現代においてどうなのかという問題は別としても、「ナウい人が書いたナウい時代」を感じてみたいものである。



目次

- 巻頭言「本と電子データ」..... 星野 珉二(1)
- ギャラリーコンサート2007..... 小椋 正行(2)
- ーカウンターの内側からー..... 鈴木 貴士(2)
- 海外の図書館事情..... 昼田 源四郎(3)
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
 - 「気候が変わる ー地球温暖化を考えるー」..... 渡邊 明(4)
 - 「20世紀ロシア農民史」..... 浅岡 善治(4)
 - 「裁判官ホームズとプラグマティズム」..... 金井 光生(4)
- 思い出の一冊..... 衣川 修平(5)
- リポジトリ..... 小沢 喜仁(6)
- 展示コーナーの利用を通じて(松川事件)..... 伊部 正之(7)
- こんなものがあったのか!..... 原田 悠人(8)